慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カントの超越論的観念論についての集中講義III （2011年3月3日 三田キャンパス東館6F G-SEC Lab/7日 東館4Fセミナー室)
Sub Title	Kant's transcendental idealism in focus part III
Author	村井, 忠康(Murai, Tadayasu)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.16, (2011. 7) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000016-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カントの超越論的観念論についての集中講義 Ⅲ
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part Ⅲ

（2011年3月3日　三田キャンパス東館6F G-SEC Lab／7日　東館4Fセミナー室）

2011年3月3日・7日に、カント哲学を主題として、Tobias Rosefeldt教授（フンボルト大学ベルリン）とStefanie Grüne博士（ポツダム大学）による講演会が三田キャンパスにて開催された。本講演は、2009年より本拠点において開催している連続講演シリーズ「Kant's Transcendental Idealism in Focus」の一環であるが、今回はとりわけ、現代の形而上学および知覚の哲学とカントとの関連性が色濃く現れた内容であった。

まず3日にRosefeldt教授が、超越論的観念論の形而上学的側面に焦点を合わせた講演「Kant's Subjectivism」を行った。カントにおける「現象」と「物自体」の区別については、伝統的には次の二つの解釈が競合してきた。一つは、この区別を心的表象と非心的対象との存在論的区別とみなす二世界説であり、もう一つは、それを同一の存在者についての方法論的区別とみなす二観点説である。教授の講演は、これらがテキスト解釈として説得力を欠くと批判したうえで、近年支持者を集めている存在論的二観点説を擁護するものであった。この説は、現象と物自体の区別を主観依存的性質と主観独立的性質の存在論的区別とみなすと同時に、これら二種類の性質の担い手が何からの意味で同一であるとする解釈である。教授は、傾向性とメレオロジカルな和という二つの概念に訴えることによって、この解釈の内実を独特の仕方で明らかにした。教授によれば、現象は、主観の構成に依存する色のような傾向的性質によって特徴づけられるものであり、物自体のあり方は、この性質の基盤である物理的性質とのアナロジーによって特徴づけられる。しかし、これをたんに性質二元論に終わらせるのではなく、現象するものは物自体と同一であるというカントの主張に適切な解釈を与える試みであるのが、教授の立場の大きな特徴であった。教授は巧みな例を用いて、日常的な経験的対象として現象するのと同じものが、われわれにはその存在論的構造が知りえない物自体の、いわばメレオロジカルな和であると論じた。

続く7日のGrüne博士の講演「Blind Intuition」は、現代の知覚論における概念主義と非概念主義の対立という図式の中でカントがどう位置づけられるべきか、という問題の提起から始まった。90年代にJ・マクダウェルが発表した概念主義的なカント解釈を契機として、カントの知覚論は、知覚ないし直観の内容を判断や信念の内容と同じく概念的であるとする立場だとしばしばみなされてきた。博士の解釈は、こうした概念主義的カント像に反対して、むしろカントを現代の対立図式で言うところの非概念主義の陣営に位置づけ直すものである。しかし、今回の講演で強調されたのは、それにもかかわらず、カントはある意味で概念主義者であるということであった。この立場の提示において博士が依拠するのは、従来の解釈ではほとんど注目されてこなかった、「曖昧な概念」と「判明な概念」というカントの区別である。博士によれば、この区別を踏まえるなら、「概念なき直観は盲目である」というカントの有名なスローガンは二通りの理解ができる。一つは、判明な概念と結合していない直観は、判断を欠くという意味で盲目である。判明な概念とは、現代の用語法での概念、つまり、判断を通じた分類や推論のために用いられるもののことである。したがって、こうした意味で理解されるわけではない概念、つまり、曖昧な概念が「盲目ではない」直観に寄与する余地が見出せることになる。このことから博士は、カントのスローガンのもう一つの理解として、曖昧な概念と結合していない感覚は、それが対象をそもそも表象しない（判断どころか見ることさえ成立しない）という意味で盲目であるという読み方ができると論じた。

両講演ともに、塾内外から多数の参加者を得ることができた。とりわけ、カント研究者のみならず、分析形而上学を始めとする現代哲学の研究者を交えて活発な議論がなされたことは、カント哲学の今日的意義の可能性を多いに感じさせるものであった。（村井忠康）

Professor Tobias Rosefeldt (Humboldt University of Berlin) and Dr. Stefanie Grüne (University of Potsdam) gave lectures as part of the lecture series "Kant's Transcendental Idealism in Focus". Professor Rosefeldt defended a version of the ontological double-aspect interpretation of Kant's distinction between appearances and things in themselves by appealing to the notions of disposition and mereological sum. Drawing on Kant's distinction of "obscure concepts" and "clear concepts," Dr. Grüne argued that while Kant should be regarded as a non-conceptualist in the contemporary sense, he is, nonetheless, a conceptualist in another sense.